

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

文学部行動文化学科社会学専修課程 3年

打越文弥

最終報告提出日：8月20日

基本情報

氏名：打越文弥

所属先：文学部行動文化学科社会学専修課程 3年

派遣形態：平成24年度夏個人派遣・学部生

研究テーマ：キルケゴールの実存主義哲学の自己論への応用可能性

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：デンマーク

都市名：コペンハーゲン 研究機関：コペンハーゲン大学神学部

(2) 派遣期間

出発日：2012年7月3日 帰国日：2012年7月29日 総日数：27日間

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要(200)

コペンハーゲン大学にて開かれるキルケゴールの実存主義哲学に関するサマープログラムに参加することを通じて、彼の思想をグローバル化した現代に応用させる可能性について考えていく。個人の主体性を重視する個人主義者であった一方、自己を根拠づけるものとして神との一対一の関係を求めた彼の実存主義哲学を読み進めていくことで、彼自身の実存思想、及びグローバル化が進行し個人がよりどころとする価値観が消失していった現代への示唆を得る。

(2) 実際に達成された成果(400)

プログラムには英米日に加えて中国やオーストラリア、シンガポール、そして現地の学生が参加していた。キルケゴールの英訳された著作を読み進めながら議論していく形式が採用されていた。渡航前までは、キルケゴールを実存主義の創始者くらいにしか思っていなかったのだが、彼のソクラテス理解や大陸哲学からの影響など、一般に知られている彼の思想以外の側面を学ぶことができた。哲学的な著作について議論するような授

業を履修したのは初めての経験で、当初は厳密な読解に基づいた指摘をしなくてはいけないのかと思っていた。しかし、授業の方向性としては、私たちの考えとキルケゴールの思想をだんだんと摺り合わせていこうとするもので、教授の肝要な姿勢もあって、多くの生徒による活発な議論がなされた光景は、問いを出されて直感的に感じたことでも、一本指を立てて発言してよいのだと感じるに至った。キルケゴールと私たちなりの解釈という対話を通じてはじめて、彼の思想の現代的意義が示唆されるということが分かった。

(3) 今後の研究展望(200)

私の専門は社会学なので、あくまで社会学と関連する範囲で今後の展望を述べたい。社会学にも、自己論は存在するが、今までの研究は自己を外部にある倫理的なものに収斂させていくものや、逆に外部の社会的構造と自己の対立を分析したものが多かった。しかし、最近では自己内部の葛藤がどのように引き起こされるのか、変遷するのかという、自己内部への関心が高まっている。そのような研究の潮流に合うような形でキルケゴールを学んだ経験を生かすことができれば幸いだ。